

(8-町)

令和8年度入学者選抜【推薦に基づく選抜】

8
|
町

小
論
文

小 論 文

注 意

- 1 問題は、からまであります。
- 2 検査時間は60分で、終わりは午前9時50分です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 横書きで使用し、文頭は一字下げをせずに書き出しなさい。また、改行はしないこと。答えに字数制限がある場合には、句読点や「」などをそれぞれ一文字と数え、解答欄外に句読点を打たないこと。数字は原則として算用数字を用います。1桁なら1マス、2桁以上は1マスに2字ずつ書きます。アルファベットは、大文字は1マスずつ、小文字は2文字で1マスに書きます。

【例】

P	C	0.	15	%	3	回	20	25	年
---	---	----	----	---	---	---	----	----	---

- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 7 受検番号を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

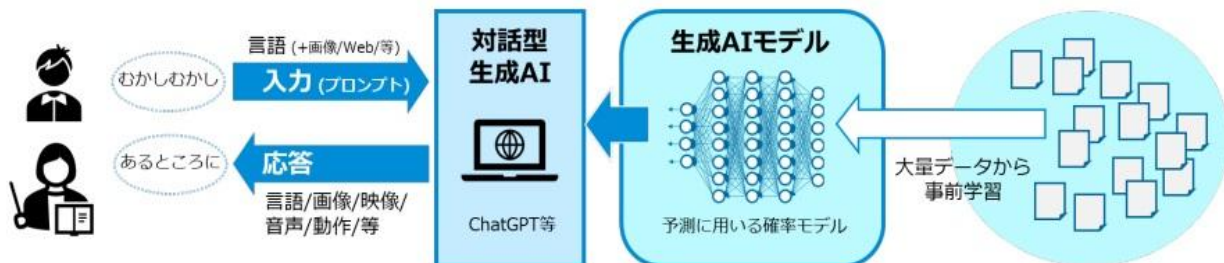
1 次の資料に関して、後の問いに答えなさい。

資料 A 「生成 AI の概要」

図 1 生成 AI とは



図 2 対話型生成 AI について



「初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン」より
(令和6年 12月 文部科学省 初等中等教育局)

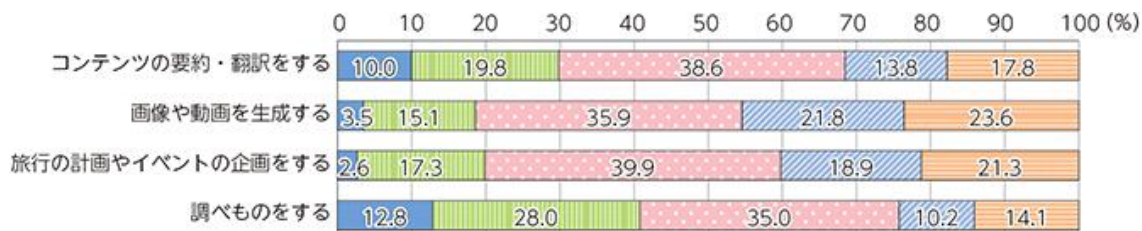
(注1) 準最適解…現実的な時間や計算能力で得られる「十分に良い解」「満足できる解」のこと

(注2) ニューラルネットワーク…人間の脳内にある「ニューロン」という神経細胞を真似した機械学習モデルのこと

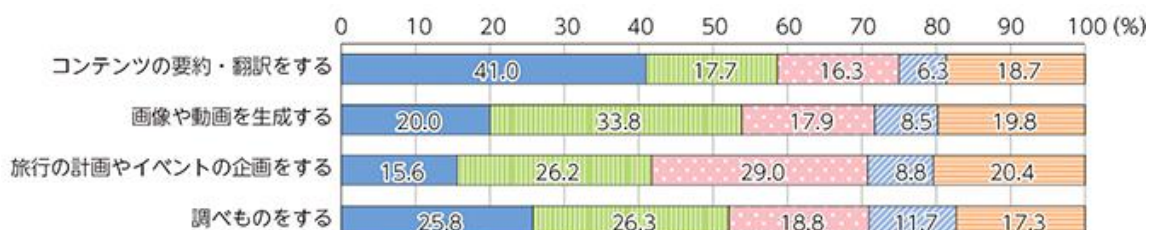
(注3) マルチモーダル…テキスト、画像、音声、動画など複数の異なる種類のデータ(モーダル)を統合的に処理する技術やシステム

資料 B 「生成AIの利用場面(国別)」

日本



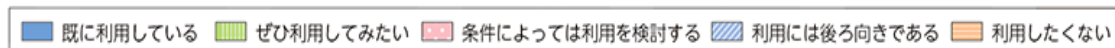
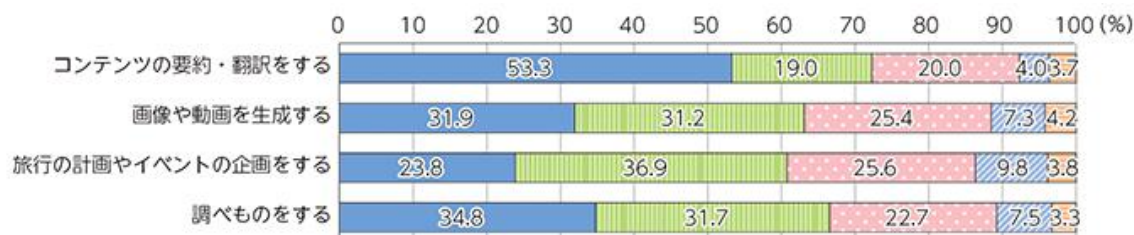
米国



ドイツ



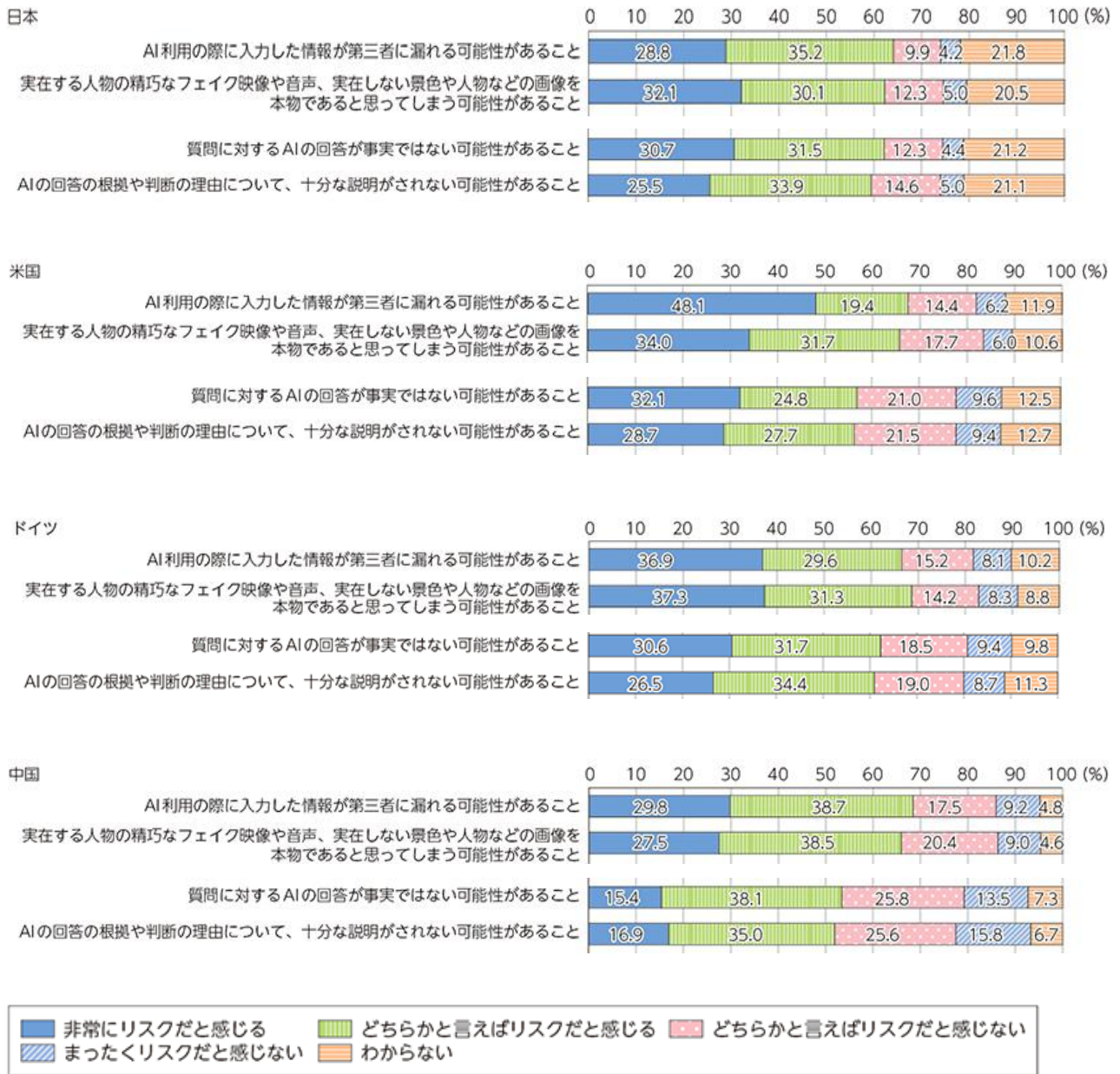
中国



「令和7年度情報通信白書データ集、国内外における最新の情報通信技術の研究開発及びデジタル活用の動向に関する調査研究、生成 AI・AI の利用意向(国別)抜粋」

(2025 年 総務省)

資料 C「生成AIの利用に伴うリスクの認識(国別)」



「令和7年度情報通信白書データ集、国内外における最新の情報通信技術の研究開発及びデジタル活用の動向に関する調査研究、生成 AI・AI の利用意向、AI 利用リスクに関する考え方(国別)抜粋」

(2025年 総務省)

問 資料Aは「生成AIの概要」を示している。資料Bと資料Cは、「生成AIの利用場面」と「生成AIの利用に伴うリスクの認識」に関する調査結果を国別に示したものである。
日本と海外全般(3か国に共通する傾向)を比較すると、生成AIの利用状況やリスクの考え方にはどのような特徴があるか説明しなさい。また、その理由についてあなたの考えを200字以上250字以内で簡潔に答えなさい。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

そこに「心」の種はあるか

1 から 100 より 0 から 1 を

言語学者の川添愛さんと対談した折に、AI のことが話題となった。私は歌集『アボカドの種』のあとがきで次のように書いている。

「言葉から言葉をつむぐだけなら、たとえば AI にだってできるだろう。心から言葉をつむぐとき、歌は命を持つのだと感じる。」歌集のタイトルは、次の一言からとった。

言葉から言葉つむがずテーブルにアボカドの種芽吹くのを待つ

今は短歌を詠む AI も開発されていて、上の句を入れると、数秒で数百首を出力したりする。それはそれで、なかなか面白いのだけれど、結局は言葉から言葉をつむぐ作業だ。生きた人間である私たちが目指すのは、心から言葉をつむぐこと。AI が 1 から 100 を生むのを横目に、自分は 0 から 1 を生みたいと思う。

意外だったのは、川添さんが「AI の創作と人間の創作を切り分ける答えだと思う。」として、『アボカドの種』から次の一首をあげてくれたことだ。

作品は副産物と思うまで詠むとは心掘り当てること

この歌が生まれた経緯については「歌うに値する体験」で触れた。ホストのみんなの情熱に気おされるようにして生まれた一首だった。

川添さん曰く「AI は作品をいっぱい作るけど、人間にとって作品はあくまで副産物であり、心を掘り当てるのが創作の醍醐味なんだと教えていただいて、すごくしっくりきました。」AI という文脈の中で鑑賞してもらい、一首が別の方向から光をあてられ、今までにない表情を見せてくれたように感じた。川添さんは、こうも言う。

「AI が書く小説がはやったら、人間の作家は職がなくなってしまうんじゃないかとよく言われますが、それは生産に焦点が当たっているから。作品を生み出すモノとして捉えたら、作家も AI も同じですよ。私は作品を書く過程で自分の中を掘り下げて、嫌だったことや楽しかったことが作品の中に何となく出てくるところが面白いので、やはり書いている過程が楽しいですよ。作品は大事だけどあくまで副産物で、文章を書いたりすることで自分をよく知ることが一番の宝物、主産物なんだと、非常に腑に落ちました。どことなく人間をマシンとして見ているから、『AI に侵食される』みたいな論が出てくるのかなと思います。」

そうなのだ。結果の優劣に意識がいきすぎると、見失うものがある。ご自身で小説も書かれる川添さんの言葉には説得力があった。

出典 『生きる言葉』 俵 万智 （本文は原文の表記を一部改めています。）

問 あなたは中学校3年間を振り返り、AI（生成 AI を含めた人工知能）を活用しながら思い出の作文を書こうとしています。書くにあたり、どのような部分を AI に頼り、どのような部分を自分の力で行いますか。AI を使う利点と、文章から読み取れる筆者の考えを踏まえて、あなたの考えを300字以上350字以内で述べなさい。